

「蛾」

江國香織

くすぐったい、と思って房子が目をさましてみると、ベッドのまわりを蛾がとんでいた。随分とまぶしい。二つある窓のカーテンが、両方とも中途半端にあいており、部屋じゅうに白っぽい光が溢れている。蛾は、房子の髪にとまったり、まぶたをかすめたりした。手で払っても、また戻ってまとわりついてくる。

上体を起こした。何時ごろなのだろう。日ざしの具合からすると、昼近いのかもしれない。私はすっかり怠惰になってしまった。房子は考える。夫の準之介がでて行ってからというもの、自分の暮しぶりはまるで保護者のいない子供のそれのようだ、と。そう考えることは、しかし不快ではなかった。もとに戻ったのだ、という安寧の底に、なにか心の浮き立つような軽みが潜んでいる。

何の音もしない。散らかす人間がないので、寝室は整然としている。広々したベッドは房子の体温だけをとどめ、房子の匂いだけがする。

カーテンが中途半端にあいているとはいえ、窓もドアもきっちり閉ざされていることに房子は気づいた。蛾は、一体どこから入ってきたのだろう。うす茶色の羽をひらひらさせて、ベッドの周辺だけをめまぐるしく飛びまわっている。すこしも疲れないらしいその小さな物体の動きを、房子は美しいと思った。

ココヨ、ココヨ、ココニイルワ。蛾は、ひたすらそう主張するような飛び方をしている。コ

コヨ、ココヨ、ホラ、ホントウニココニイルノニ、イマココニイルノニ。

それは、何かこの世の外側から紛れこんだ物体であるように見えた。神々しさにまばたきをする。すくなくとも、房子の知っているこの世の、論理や法則の一切が通用しない世界に、属している物体なのだ。

「おいで」

声をだしたのは戯れだった。蛾がひらひらと寄ってきて、房子の眼前にとどまろうとは思ってもみななかった。

ゆっくり、ゆっくり、手のひらをさしだす。蛾は房子の中指の先にとまり——糸ほどにもきやしゃな足に、皮膚をつかまれるのを確かに感じた——、思わせぶりにまを置いて、つと、飛びたつた。房子は、つめていた息を吐きだした。

「びっくりした。言葉がわかるのかと思ったわ」

蛾に向かってというよりも、自らの子供じみた振舞に対する言い訳として、房子は呟いた。

蛾は空中を、たのしげに飛びまわる。ココヨ、ココヨ、ココニイルワ。ミテ、ミテ、ワタシヲミテ。

このときにはまだ、房子には、きょうがその日だということがわからなかった。

わかったのは、朝食を済ませ、洗濯機をまわしながら新聞に目を通しているときだった。玄関チャイムが鳴り、でてみると、日に焼けてよく太った、中年というべきか初老というべきか迷う年配の女性が立っていた。手に、植物の入ったビニール袋を一つ提げている。

「奥さん、これ、買ってえ」

房子を見ると、いきなり泣きそうな顔と声で言った。同時に、手に提げた袋を持ち上げてみせる。ビニールとは言っても透明ではなく白い袋で、植物だということがわかるだけで、中身は見えない。

「私、鉢植えの行商してて、茨城から来たの。これ、秋になったら赤い実がついてきれいだから買って」

どういわけか大急ぎの様子で、早口に女はまくしたてる。

「私、植物を買っても枯らしてしまうから」

房子は行商人が苦手だ。自分でははっきり断っているつもりでも、気がつくど欲しくもないものを買わされている。でて行った夫の準之介は、房子がそのようにしてものを買わされるたびに気の毒がった。文句を言うのではなく、叱るのでもなく、気の毒がるのだった。そして言った。優柔不断のせいで買わされるんなら叱りようもあるけれど、きみの場合は無知ゆえに買わされるんだから、どうしようもないじゃないか。かわいそうに。

「そう言わずに、買って」

女は言い、房子の手に無理矢理ビニール袋を押しつけると、誰もいないしろをふり返り、

「もう亭主が来ちゃう」

と、口走った。声をひそめ、

「これ売れないと、殴られるの。痛いんだア、亭主こわくて」

と、続ける。たったいま殴られたみたいに、顔をしかめている。

「五千円でいいから、買って」

青い空だ。房子はため息をつく。

「いいわ。買うわ」

会話を続けることが億劫になるのだ。たとえばこの女に、「亭主」の話をこれ以上させたくない。
い。

財布を取りに、いったん家のなかへ入る。準之介が見たら、こんな女は捨てて正解だったと

思うだろうか。そう考えると胸が軋きしんだ。戸籍上は依然として夫であるその男を、房子は確かに慕っているのだ。

準之介とは、父親の葬儀の際に知りあった。放心状態だった母親と、当時まだ学生だった房子との二人きりでは、病室から霊安室、自宅、葬儀場、火葬場から墓地に至る父親の死出しでの旅の、何一つ満足に差配できなかっただろう。準之介は父親の勤めていた会社の社員で、数人ですらやってきて、何もかも代りに手配してくれた。その後も何くれとなく相談に乗ってもらっているうちに、そういうことになった。準之介は正直な男で、房子はまさにそこにこそ魅力を感じたのだったが、結婚して二十年近くたったいま、準之介は正直にも他の女を好きになったことを隠しめせず、家をでたまま帰ってこないのだった。

「お水、どのくらいあげたらいいのかしら。日に当てた方がいい？ それとも日陰向きの木なのかしら」

金を払い、房子は女に尋ねた。

「適当で大丈夫」

女はこたえた。

「それより奥さん、いいひとだね」

房子がつい眉をひそめたのは、女の前歯が数本抜けていることに気づいたからだ。それは、ただでさえ美しいと言いついた女の顔を、さらにおそろしげに見せた。

「私も昔は奥さんみたいな暮しをしてたんだよ。信じられないかもしれないけどさ」

いったん金をうけとってしまうと、女はいきなり饒舌になった。早口は変らないが、怯えている気色は微塵もない。

「奥さん、ゆうべ一人で酒のんだでしょ。ワインだね。シヤブリか何か。わかるんだよ、私」

房子はそもそも酒がのめない。

「そいで奥さん、猫飼ってるでしょ。猫って言っても本物じゃなく、ぬいぐるみの猫。ぬいぐるみなら手間かかんないからね。水もやらなくていいし」

女はケタケタと笑う。他愛のない世間話。誰が見てもそう思うだろう。

「やっぱし子供いないと淋しいよね。私は三人産んだけどさ。でもいくら淋しいからって昼間から男連れ込んだりしちやまずいよね」

思いがけない言葉の奔流に、房子は怯^{ひる}み、足が竦^{すく}んだ。女の口元から目をはなすことができない。真昼の太陽が、平和な住宅地を照らしている。房子はぬいぐるみの猫など飼っていないし、男を連れ込んだこともない。

「まあ仕方ないよね。女には情念つてもものがあるから。毎日きれいなおべべ着て、人参の皮むいてるだけじゃやってらんないよね。私にはわかるよ、奥さんの気持ち」

ああ、きょうはその日なのだ。恐怖の底で、房子ははっきり確信した。そうでなければ、見ず知らずの女に中傷されるいわれはない。

その日について、くわしいことを房子は知らない。ただ、その日が存在することだけは経験上知っている。何もかも上手くいかない日、あるいは、何が起きても不思議のない日。世界が奇妙な具合にねじれたり歪んだりし、その出来事の前で、茫然と立ちつくすほかにない日。

房子の信じるところによれば、そういう日は何もせず、家のなかでじっとしているべきなのだったが、きょうは、生憎^{あいにく}予定が二つあった。準之介の弁護士がじきに訪ねてくる約束になっ

ており、その憂さ晴らしに——くさくさするに違いないから——、夜は義理の妹の遙^{はるか}と、食事

をすることが決まっている。

「よりによってこんな日に」

房子は顔をしかめ、コーヒーカップを流しに運んで洗った。新聞の、続きを読む気はどうに失せている。買ってしまった鉢植えは、とりあえずリビングの床の、日あたりのいい場所に置いた。黒っぽい深緑色の葉が、袋の外にでてぶると身をふるわせたように思えた。

その日の存在に房子が最初に気づいたのは、小学生のときだった。昼休みに校庭で遊んでみると、茶色いオーバーコートを着た男が近づいてきた。まわりには、他にも大勢子供たちがいた。ドッジボールに興じていたり、ジャングルジムにのぼっていたり、ただ立っておしゃべりをしていたり。房子は鉄棒の横にいた。二、三人の女の子たちと、交代でその遊具を使っていたのだった。晴れて、風のない日だった。男は、まっすぐ房子に近づいてきた。歓声や笑い声、ブランコの軋む音、ボールを受けとめる音、男の子たちのどなり合う声。

「鉄棒、上手だね」

男は言った。顔に、へつらうような笑みを浮かべている。不精髭には白いものがまざり、髪は黒かったが脂じみて見えた。

すぐそばに、仲のいい友達が何人もいたのだ。房ちゃん、どうしたの？ その人、誰？ 誰かがそう言うってくれてもよさそうなものだったが、誰も、何も言わなかった。まるで、男などそこにいないか、あるいはいるのに房子にしか見えていないか、どちらかのような感じだった。

「おじさんと一緒に来るかい？」

男は房子をまっすぐに見て言い、手をさしだした。手をとりそうになったのは、そうする以外にないような気がしたからだ。誘拐という感じではなかった。そういう物騒な、乱暴なものではなく、男は房子をどこかに連れだしてくれようとしているのだと思えた。どこか、ここではない場所に。それは自然なことと思えた。自然というより、むしろ必然的なことにさえ感じ

られた。歓声や笑い声、校庭の喧噪のすべてが遠いものになった。聞こえているのに、自分とは関わりのない、べつの世界の音になった。世界が消滅し、自分と男だけが残った。だからついて行かなくてはならない、そんなふうに思えた。

「そうか、いやか」

男が力なく笑って手をひっこめたとき、房子はほとんど絶望した。電車に乗り遅れたような、とり返しをつかない失態を犯した、それは悲しみだった。

「いいんだ、気にしなくて」

男は言い、ゆっくりした足どりで、正門に向かって去って行った。房子は追いかけていきかかった。置き去りにされるようで心細かったし、男をがっかりさせたようで辛くもあった。世界に二人だけ残った者同士なのに――。

「房ちゃん、いまの誰だったの？」

友達の人に訊かれ、房子はぎよっとした。男が現実において、誰の目にも見えていたことを知り、そのときになってようやく、恐怖がばっくり口をあけた。

男は二度と現れなかった。しかし房子にはわかっている。あとき自分はもうすこしでついていくところだった。あと一歩だった。世界は決して一つではないし、その境界は存外曖昧で、滑り落ちろと言わんばかりに入り混じる日さえ、稀にだがあるのだ。

弁護士に会うのは二度目だった。深川という名のその弁護士は若く、若いくせに覇気のない、陰気な男だった。肌が青白く、妙に手指の長いことも房子の気に障った。その長い指で、紙束を揃えたりテーブルに広げたりする。準之介は、何だってこんな男を雇ったのだろう。腹立たしい気持ちで、房子は目の前の男を眺めた。弁護士は、ペットボトル入りのお茶を持参して

いる。房子にもてなす気のないことを承知しているのだ。

「ちよっと失礼して」

そう言って、ボトルから直接お茶を口に運ぶ。彼の話に新味はない。いわく、御主人は離婚を望んでいる。調停は望んでいない。理由は双方消耗するから。家はいらないとやっている。

預金は折半しようと言っている。御主人の居場所は教えられない。

房子は聞いていなかった。弁護士髪の毛の毛——短く刈り込んでいる——や、そこからのぞく頭皮、ストライプのシャツの衿元や袖口、落着きなく動く目や、乾いて色のうすい唇を見ていた。以前に聞いたのとおなじ話だったし、房子には、籍を抜くつもりはなかったからだ。

「深川さん」

弁護士の言葉が途切れたところを見はからって、房子は言った。

「はい」

相手はいやに落着いた声をだし、くだん件の細長い指を、テーブルの上で組む。そのとき、男の背後でわさわさと鉢植えが揺れた。わさわさと音をたてて、揺れるというより震えるような動きで。行商の女から買った、秋には赤い実をつけるといふあの鉢植えだ。房子の目は弁護士を通り越して、否応なくそこにひきつけられた。室内にはエアコンをつけてあり、窓はぴったり閉めきつてある。

「どうしました？」

弁護士に問われたが、房子は鉢植えから目を離すことができない。葉のすきまから、何かが床に落ちるのが見えた。何か小さなものが、ぽとりと、またぽとりと、またぽとりと。次々に落ちる。投身自殺みたいだ。

「奥さん？」

弁護士が房子の視線を追ってふり返ったので、

「見えました？」

と、房子は尋ねた。

「何がですか？」

尋ね返す弁護士の声には、苛立ちが滲^{にじ}んでいた。

「あの鉢植え」

房子は怯まずに言い、立ち上がって落下物を見に行く。

「さつき行商の人から買ったものなんですけれど」

それはかたつむりだった。殻は直径が二センチほどもあり、その下の肉体は、わずかに茶がかった乳白色だ。立派なツノが、ニューとなめらかにのびている。そんなかたつむりが、日ざしのなかで濡^ぬれ濡^ぬれと光り、四匹も床を這っていた。

「はあ」

弁護士もいつのまにかテーブルを離れて、房子の傍に立って床と植木を見下ろしていた。

「かたつむり、見えます？」

「ええ。飼ってらっしゃるんですか？」

「まさか」

房子は反射的に顔をしかめた。

「私は動物は飼っていません。もちろん、ぬいぐるみの猫もです」

「はあ」

四匹のかたつむりは、這ったり、じっとしたり、している。房子の家の居間の、床の上で。

「この子たち、この鉢植えから落ちてきたんです。ぼたぼたぼたって。一匹ずつが光って、き

れいだった」

弁護士は、もう「はあ」とさえ言わなかった。

「おかしいと思いませんか？」

房子は続ける。

「この子たち、どこからきたのかしら」

かたつむりはそのままにして、テーブルに戻った。喉が渴いた。房子は台所に入り、冷蔵庫から麦茶をとりだす。いくら相手がペットボトル持参だからといって、一人だけのむのもどうかと思われ、コップも二つ運んだ。

やっぱりきょうはその日なのだ。房子は確信を深める。何かがずれてしまった一日。

「朝は蛾も入ってきたんですよ」

一瞬でも蛾に言葉が通じたことは言わなかった。話したところで信じてもらえないことはわかっていた。

「このぶんじゃ、他に何がでてくるのかわかったものじゃないわ」

「話を元に戻しませんか」

弁護士は真面目な顔をして言った。房子が置いた麦茶のコップを、紙束から遠い場所に移動させる。

「どうぞ」

あの紙束には何が書いてあるのだろうか。そう思いながら房子はこたえた。準之介の語りたいきさつ？ 妻への不満？ それとも、私たちの結婚生活の年表のようなものだろうか。

準之介が家をでて、半年になる。房子が思いだすのは、たとえば果物をむくと、甘えてあーんと口をあける準之介の顔だ。背中が痒いから搔いてくれと言い、搔いてやっても、そこではない、もっと左だ、上だ、もうすこし右だ、と大騒ぎをする準之介だ。房子に向かってきみは

無知だなと言うときの、おもしろがるような表情。毎晩抱いて眠った腕の形。実際、自分たち夫婦は仲がよかったのではないだろうか。

「俺たちのことに口をはさまないでくれ。」

「準之介にそう言われたときには、だから房子は非常に驚いてしまった。俺たち？ 訊き返し、ヒステリックに笑った。俺たちですって？ あなた、いまそう言ったの？」

「ともかく」

弁護士が何か話していたようだがそれには耳を貸さず、背すじをのばして房子は言った。

「ともかく夫に伝えて下さい。帰りたくなければ帰らなくても構いませんって」

自分でも奇妙に思えるのだが、ほんとうのことだった。房子は準之介をいとしいと思うが、帰ってきてほしいとは思わなかった。いないならいなくて、快適であるように感じる。

かたつむりは、床のあちこちでじっとしている。弁護士が帰り、家のなかに一人きりになった房子の目に、その光景はどこかなつかしい、心安まるものに映った。

「迎えにきてくれたの？」

例によって戯れに、房子は話しかけてみる。

「どこに連れて行ってくれるの？」

かたつむりたちは動かない。夕方の光のなかで、ただじっとしている。

房子には、誰にも話したことはない思い出があった。七歳の春のことだ。母親が出産のために入院し、その夜、家には父親と二人だけだった。多摩丘陵の端に位置する二階家は、母親がいないだけでいやに広くがらんとして、廊下のあかりや居間のテレビのこぼす音が、その家庭的さ加減の故にかえって嘘くさく、父親と二人で捨て置かれたような房子の不安を、あおった

のを憶えている。そばだったか鮪だったか、そここの記憶は曖昧なのだけれど、ともかく店屋てんやものをとって夕食にした。病院からの電話を待ちながらテレビをみて、父親と何を話したのか話さなかったのか、思いだすことはできない。ともかく何となく気詰まりで不安で、しかし不安がつていることを悟られてはいけないような気がして、七歳なりにあれこれ気を遣ったのだった。

「歯を磨いてくる」

房子は言い、廊下にでた。後ろ手に襖を閉め、しかし右手奥の洗面所には向かわずに、房子はすぐ左にある玄関で、母親のサンダルをはいた。できるだけ音をたてないように、そろそろとがらり戸をあけて、おもてにでた。あたたかい夜で、闇はどこもかしこも湿っていた。

なぜそんなことをしたのかわからない。新鮮な夜気を吸いこめてほっとして、もっとほっとしたいと思っただったろうか。房子は家のまわりをぐるりと歩こうとした。それ以前から、房子には、自分の家の外観を見ると安心する癖があった。ことに夜、部屋のあかりが窓から見えたり、風呂場の裏につきだした銀色の煙突から湯気が漂いでるのが見えたりすると、得もいわれず心が落着いた。

しかしその夜、房子はいつものように家を一周することができなかった。玄関をでて、家の横手にまわり、壁を見上げた途端に凍りついたようになって、その場を一步も動けなかったからだ。壁には、いちめんにかたつむりがはりついていて、見たこともないほど大量のかたつむり。上に行けば行くほど数は減っていたが、房子の目の高さから見る限り、それはびっしりと、ほぼ壁じゅうを埋めつくしていた。ひ、と、声をあげたかもしれない。あげたとしてもごく小さな声だったし、そのあとは何の言葉も発せられなかった。塀の外側に街灯が一つあって、そのあかりが、かたつむりたちを照らしていた。房子はただ息を吞んでみつめた。かたつむりな

ど珍しいものではなかったが、それだけたくさん一時に目にすると、一匹ずつの形状や質感の異様さ——あの夜の彼らは、全くこの世ならざるものだった、と、房子は思う——が透明に、というのはつまり、ひどくはっきりと、見る者の目に迫ってくるのだった。

房子は悲鳴をあげて逃げ帰ったわけではない。何もなかったように静かに、ゆっくりと歩いて家に戻った。父親には何も告げなかった。今夜、この家は異様なことになっているのだ。安らかとさえいえる諦念と共に、そう知ったのだった。

翌朝早く、母親が産んだ赤ん坊は男の子だったが、この世にわずか七分しかとどまらず、産声をあげることもなく死んでしまった。

ここの豆の煮込みが絶品なのだ、と、遙は言った。房子と同じ年だが独身で、旅行会社の海外勤務の長かった義妹の遙と、房子は不思議に馬が合う。準之介の出奔後も、遙が房子の家に様子を見に寄ってくれたり、房子が自分用に取り寄せた食材を遙に宅配便で送ってやったり、交流が続いている。

実の兄が女をつくって家出をした、と知ったとき、遙は動揺した顔もせず、くはははは、と、悲しそうに笑った。ばかだねえ、準之介は。そして、そう言った。遙のそういうところが、事を大袈裟にせず、起きたことを起きたままに受けとめるようなところが、房子には好もしく思えるし、一緒にいて気が楽になりもするのだった。

青豆のスープ、白豆の煮込み、トマトサラダ、ソーセージ、パン、というのが、遙が房子のために注文した料理で、勤めている旅行会社から近いというこのドイツ料理屋は、遙の「台所」であるらしい。

「で、どうだったの？ 弁護士さんとの話し合いは。準之介、どこにいらんだって？」

「全然だめ。なにも教えてくれないの」

房子はこたえ、りんごジュースをごくりとのみだ。ビアジョッキに注がれたそれは、持ち上げるのもやつとという重さだ。遙は準之介の居場所を知っているのかもしれない。なぜということもなく、そう思った。

「困ったねえ、準之介も」

遙はビールが好きで、ドイツ料理屋でない場所でも、ビールばかりのむ。この華奢きゃしゃな身体でよくぞ、と房子が感心するくらい、いくらでもものむのだ。

店は混んでいて賑やかで、家庭的というのか、温かな雰囲気がある。一見したところ、背広姿の勤め人が多い。ある程度年齢が高く、収入もそれなりにある男たちが、女つ気は抜きで、同僚や後輩を連れて来たくなる類の店らしい。そんななかに、カウンター席に一人きりで坐り、ビールと煮込み料理という質素な食事を悠然と摂っている老女——半分以上白髪となった髪をまつすぐに長く背中にたらし、紫色のシャツとジーンズ地のロングスカート、という個性的な装い——がまぎっていることに目をとめ、房子はなんとはなしに感心した。老女の素姓は無論わからないけれども、毅然としていて立派だと思った。

「準之介の性格を考えるとね、房ちゃんが籍を抜かない限り甘えていて、いずれ帰ってくることは間違いないと思うんだけど、でもねえ、それが房ちゃんにとっていいことなのかどうか、私にはわからないのよね」

遙が言う。

「いいことよ」

房子はこたえた。

「というか、それでいいんだと思う」

身勝手にインテリで甘ったれの、準之介という男を結局のところ自分は愛しているのだし、理解してもいるつもりだ。そのことを、準之介が十分よく知っている、という自信もある。口にこそさださなかったが、房子はそう考えて、鷹揚に見えるはずの笑みを浮かべる。

「それよりね、きょうはちよつと変なことのある日なのよ」

声の調子をあかるくし、房子は遙に一日の出来事を語った。蛾に始まって、行商人に見当違いの中傷をされたこと、弁護士の後でぼたぼたと落下したかたつむりのこと、そのかたつむりは出がけに塵取で集めて庭に捨てたこと、までかいつまんで話し終えると、遙は大きな目を小さく細め、くはははは、と、笑った。

「そのどどこが変なことなの？ 虫なんてどこにでもいるし、見当違いの中傷なんて、私しょっちゅうされてるわよ。世間って、そういうところよ」

「そうかしら」

房子はこたえ、でも、蛾は昆虫だから虫で正しいけれども、かたつむりは虫ではなく、あれは何て言うのかしら、軟体動物？ と、考えていた。

「そうよ。世間知らずね、房ちゃんは」

遙はあっさりと片づけ、それよりね、と、話題を変えた。

「私、水泳を習い始めたの。楽しいわよ、とっても。房ちゃんも何か運動した方がいいわ。誰もいない家のなかで、ただじつとしてるなんていうのは不健康よ」

水泳教室の場所やレッスンの料金、自分の年齢の半分にも満たない、年若いコーチの肉体の美しさ、などなどについて遙は勢いよく喋り、だから房ちゃんの心身にも絶対有効だと思うのよ、とまとめると、美味そうに、喉を鳴らしてビールをのんだ。

「そうねえ」

水泳に興味のない房子は曖昧に相槌を打ちながら、そのすこし前の遙の発言を、胸の内転

がしていた。世間って、そういうとこよ。

そうだろうか。房子は考える。ほんとうにそうなのだろうか。奥さん、ゆうべ一人で酒のんだでしょ。行商人の女の、下品な口調が耳元に蘇り、房子は思わず身を縮める。わかるんだよ、私。そいで奥さん、猫飼ってるでしょ。猫って言っても本物じゃなく、ぬいぐるみの猫。

もしもあの女が世間なら、私にとっては世間より、蛾やかたつむりの方がずっと親しいものに思える。ずっと親しく、なつかしいものに――。房子はそう考えて、みじん切りにした玉ねぎの散った、トマトサラダにフォークをのぼした。

「ちょっとお化粧室に行ってくるわね」

そう言っただけで席を立った遙が戻ってきたとき、房子は自分の目を疑った。

「どう？ 房ちゃん、これ。新調しちゃったの」

テーブルの横に立ち、両腕を広げてみせた遙は、水着姿だった。かつてはそれなりに男たちに愛された女だったらしいとはいえ、体型のすっかり崩れたいまとなっては、水着姿には見るに忍びないものがあった。

「遙ちゃん」

驚きのあまり、房子はそれ以上何も言えず、恥かしさに身を強張こわばらせた。

「競泳用だから胸はつぶれちゃうんだけど、この生地、発色がすごくいいでしょう？」

ほんと、とこたえたのは、カウンター席にいた老女だった。

「とてもよくお似合いよ」

どうしてこんなところでそんな恰好になっちゃったの？ 房子の言葉は喉にひっかかり、どうしても声にならない。店内にたくさんいる他の客も、何ら驚いた顔は見せていない。まるで、ドイツ料理屋で水着姿になることなどありふれている、と思っただけでもいるみたいに。

喧噪が遠ざかっていく。料理も、テーブルも、他の客も、何もかもそこにあるのに、ひどく遠い。自分だけが世界からはみだしていることを、房子は強く意識する。昔、小学校の校庭に男が現れたときとおなじ気持ちだった。

半分減った、りんごジュースのジョッキの陰に、かたつむりが一匹這っていることに房子は気づく。汗をかいたジョッキのせいで、テーブルのそのあたりは濡れているのだ。上を見ると、いまや友達のような気のするうす茶色の蛾が一匹、天井の近くをひらひらと飛びまわっていた。